

Numéro251

Mon Nara



Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 juillet-août 2012 7,8 月合併号



La célébration de la Fête Nationale du 14 juillet à Kyôto et en France

(日本語訳は次ページを参照ください)

Olivier Jamet, vice-président de l'AFJN

Samedi 14 juillet 2012, une centaine de personnes s'étaient rassemblées à Kyôto, au Consulat Général / Institut Franco-Japonais du Kansai, pour fêter la Fête Nationale française à la très aimable invitation du Consul Général et de son Epouse, M. et Mme Janvier-Kamiyama. Parmi les nombreuses personnalités invitées, on pouvait compter le Maire de Kyoto, les représentants des départements de Kyoto, d'Osaka et de Hyôgo, des représentants des milieux d'affaires, artistiques ou universitaires, ainsi que le corps diplomatique.



A 18h30 précises, devant l'assemblée debout, résonnèrent les hymnes japonais et français. Dans son discours, le Consul Général de France salua ses nombreux invités et les informa que l'élection au printemps dernier du nouveau Président de la République Française, Monsieur François Hollande, allait renforcer encore plus énergiquement les relations franco-japonaises, déjà empreintes d'excellence exemplaire. Plus particulièrement, seront renforcés entre nos deux pays les échanges d'étudiants.

Cette Fête Nationale du 14 juillet salue le premier jour de la première (il y en eut en tout six) révolution française le 14 juillet 1789, date symbolique de la prise de la forteresse de la Bastille et de la fin de l'absolutisme, ainsi que le 14 juillet 1790, journée d'Union nationale lors de la Fête de la Fédération à laquelle participèrent 100 000 Parisiens et le Roi Louis XVI qui, à cette occasion, prêta serment à la Nation et à la Loi.



Cette Fête Nationale du 14 juillet est fêtée depuis le 14 juillet 1880 et célèbre la prise de la Bastille. Elle se compose traditionnellement d'un défilé militaire le matin sur l'avenue des Champs-Élysées et, le soir, d'un feu d'artifice et de bals populaires dans les rues, sur les places et, à Paris, dans les casernes de pompiers.

Défilé du 14 juillet à l'hippodrome de Longchamp vers les années 1900

(ロンシャン競馬場における 7 月 14 日
軍事パレード、1900 年頃)

Le défilé militaire a été institué dès le 14 juillet 1880, pour faire savoir à l'Empire allemand le redressement militaire de la France après la défaite de 1870 et pour entretenir dans l'opinion publique française la mobilisation des esprits (pour la rétrocession à la France de l'Alsace-Lorraine).

Pour les Français, en général, où les traditions militaires restent encore fortes, ce défilé du matin du 14 juillet est un événement important, très suivi, soit en se déplaçant physiquement sur les lieux où ils sont organisés à Paris ou en province, soit devant le poste de télévision.

En ce qui me concerne, en toute franchise, je vénère cette nuit du 4 août 1789 qui verra l'abolition des privilèges dans une atmosphère incroyable de liesse populaire et de fusion nationale.



Le Peuple de France abolit les privilèges injustes.
(フランス人民が不当な特権を打ち砕く)

京都とフランスで7月14日国の祭日（パリ祭）を祝う

オリヴィエ・ジャメ（副会長）

2012年7月14日土曜日、フランス総領事ジャンヴィエ・カミヤマ御夫妻の懇切なる招待に応じてフランスの国の祭日を祝うべく、およそ百名の人々が京都の総領事館 / 関西日仏学館に集まった。招待された人物の中には京都市長をはじめ、京都府・大阪府・兵庫県の代表者が見られ、実業界、芸術、大学など各界の名士、そして外交団の姿もあった。

ちょうど18時半、集まった人々が起立するなか、日仏両国歌が流れた。フランス総領事はご挨拶の中で、数多くの招待客に敬意を表するとともに、この春フランス共和国の新大統領にフランソワ・オランド氏が選ばれたことは、すでにすばらしい実績のある日仏関係をいっそう力強く強固なものにするだろうし、特に我々二国間の学生交換が強化されるだろう、と表明した。

この7月14日の国の祭日は、1789年7月14日に始まった最初のフランス革命（全部で6度あった）の初日、すなわちバスティーユ要塞の奪取と絶対王政の終焉を象徴する日、および1790年7月14日、10万ものパリ市民と、この機会に国民と法律に宣誓した国王ルイ16世が参加した連盟祭（フランス革命一周年記念祭）が行われた国民連合の日に敬意を表するものである。

この7月14日国の祭日は、1880年7月14日以来祝われ、バスティーユの奪取が賛美されてきた。この祭りは伝統的に午前中のシャンゼリゼ大通りの軍事パレード、晩の花火大会と街路や広場で（パリの場合、消防署でも）行われるダンスパーティから成る。

軍事パレードは、1880年7月14日に創設された。それは、1870年の敗北後、ドイツ帝国に対しフランス軍の再興を知らしめるため、またフラン共和国の世論における（アルザス・ロレーヌのフランスへの返還を目指した）士気の高揚と維持を目的とするものであった。

一般的に、軍事的な伝統が今もなお強く残るフランス人にとって、この7月14日朝のパレードは重要な行事であり、人々はパリや地方で行われる軍事パレードの現場に出かけるなり、テレビの前で見物するなりして、見守るのである。

私自身としては、ごく率直に言って、1789年8月4日の夜の方を尊びたい。まさにその夜に、人民の歓喜と国民の融合という信じ難い雰囲気の中、諸特権が廃止されたのだった。

（日本語訳：濱 恵介）

名句の花束 (22)

三野博司（副会長、奈良女子大学教授）

Vienne la nuit sonne l'heure / Les jours s'en vont je demeure (3)

夜よ来い 時よ鳴れ／日々は流れゆき ぼくは残る

(アポリネール「ミラボー橋」1913)

(承前) 手元に « Paris : 34 ponts » (パリ 34 本の橋) というタイトルの小さな本があります。パリ観光案内本の一つで、セーヌの上流から順に 34 本の橋が写真とともに紹介され、ミラボー橋は最後から 3 つ目の 32 番目、アポリネールの詩の冒頭が引用されています。いつ買ったものか記憶が定かではないのですが、写真はすべて白黒で、発行年はと見ると 1972 年で 40 年も前。パリのセーヌに架かる橋はその後 3 本が新設されて、現在では « Les 37 ponts de Paris » という本が刊行されているようです。

渡辺守章著『パリ感覚』（1985 年）では、第 1 章で「橋づくし」とでもいうべき随想が繰り広げられます。シュリー橋に始まり、さまざまな橋についての著者一流の蘊蓄が傾けられますが、ミラボー橋については、「かのミラボー橋は、上流の堤防によって二つに分けられたセーヌが、再び一つに合流するところにかかっている」とだけあり、もう今さらこの橋についてアポリネールやローランサンについて語ることもあるまいと言った風情です。

ミラボー橋は、エッフェル塔からさらに下流へ、自由の女神が立つ「白鳥の小路」と呼ばれる堤防のその先にあります。現在では Google earth で「ミラボー橋」(日本語で可) と打ち込んで検索すれば、たちまち橋の上空へと連れて行ってくれます。

なんの変哲もない鉄製の橋ですが、有名になったのはアポリネールの『アルコール』に収められた詩「Le Pont Mirabeau ミラボー橋」がきっかけでした。



多くの画家とも交際のあったアポリネールは、ピカソにマリー・ローラン

サンを紹介され、恋仲となりました。彼は、母親と暮らしていた女流画家の近くのアパートに引っ越して、自宅に帰るときにこの橋を通ったのです。

5 年後に 2 人は別れますが、詩人は過ぎ去った恋を、セーヌの水の流れに託しました。「ミラボー橋の下をセーヌが流れ／ぼくらの恋も流れる」と始まり、川の水のように過ぎ去った時も恋も戻ってはこ

ないと歌われます。「恋はすぎる この流れる水のように／恋は過ぎ去る／人の世の何と歩みのおそいこと／希望ばかりが何と激しく燃えること」といった感傷的な詩句は、現代派のアポリネールとはまた異なった一面を見せています。とりわけ知られているのは、四回繰り返される次の二詩句です。



Vienne la nuit sonne l'heure / Les jours s'en vont je demeure

夜よ来い 時よ鳴れ／日々は流れゆき ぼくは残る

前半の Vienne, sonne はともに動詞が接続法現在形になっていて、祈願を表しています。また後半の「日々は流れゆき ぼくは残る」は、15 世紀の詩人フランソワ・ヴィヨンの『大遺言書』のなかにその原型があるといわれています。

ローランサンには、『アポリネールとその友人たち』と題された絵があります。詩人の作品が 2 人の関係が破綻したあとに書かれたのに対して、こちらの絵は、恋人同士だったときに制作されました。絵の中央にアポリネールが腰掛けていて、右端にローランサン、あとピカサや友人たち数名が描かれています。アポリネールの右肩奥に小さく見えているのがミラボー橋だと言われていますが、橋桁の間隔が狭くて、実際のミラボー橋とは印象がかなり違います。

世界的な風邪の流行が話題になるたびに引き合いに出されるのは、1918 年～19 年に猛威をふるったスペイン風邪です。アメリカに始まり、ヨーロッパに波及し、さらには世界中に広まりました。感染者 6 億人、死者 4,000～5,000 万人というとうほうない数字が残っています。著名人も犠牲となりました。ドイツのマックス・ウェーバーのほか、日本では私たちになじみの奈良ホテルを設計した辰野金吾、そしてフランスではなんとしてもアポリネールです。彼が亡くなったのは、「ミラボー橋」発表から 5 年後、1918 年 11 月 9 日、第 1 次世界大戦の休戦条約が結ばれる 2 日前でした。

Junko のパリ便り (9)

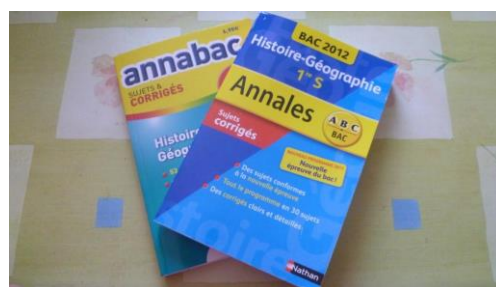
バカロレア

高橋 潤子

7月5日午前10時すぎ、フランス各地の高校ではバカロレアの可否の発表が貼り出された。バカロレア試験(通称バック)とは高校卒業資格試験のことで、これに合格しなければ大学などの高等教育機関に登録することができない。就職に際しても、採用の最低条件がバカロレア取得というところが大部分だ。そのため発表の朝は悲喜こもごもの光景が繰り広げられることになる。バカロレアというのは、ラテン語の *baccalarius* (騎士をめざす若者) と *laureare* (月桂冠を得た) が合わさった語で、中世では神学、医学、法律、美術の大学ごとに認定される資格であり、合格者は教授の助手となることができたという。1808年のナポレオンの教育改革によって、バカロレアは国家資格となり、さらに1927年以降は、高校卒業時に取得する中等教育終了資格となった。普通高校で準備される一般バカロレアの他に、職業高校や専門学校で準備される技術バカロレア、職業バカロレアが存在する。

一般バカロレアには理系、社会・経済系、文系の3つのコースがあり、高校三年生で学んだ範囲がすべて出題対象となる。ほとんどの教科は高校三年生の6月に受験となるが、フランス語や、文系ならば数学、理系は地理・歴史、社会・経済系は理科の試験が、高校二年生の学年末にすでに行われる。各教科それぞれ20点満点で点数がだされ、最終的に総合成績が20点満点中の10点以上となれば合格である。単なる全教科の平均点ではなく、例えば理系だと数学や物理、社会・経済系だと経済や歴史、文系だと哲学や語学などの教科でいい成績をとれば、他で多少失敗してもカバーできるという仕組みになっている。バカロレアの最終結果が12点以上は *assez bien*、14点以上は *bien*、16点以上だと *très bien* という *mention* がつく。要は「良好な成績で」「優秀な成績で」「非常に優秀な成績で」合格したという但し書きである。進学先によっては最低でも *mention bien* をとっていないといけないなどという学校もあるし、自治体によっては *bien* や *très bien* をとった生徒を表彰して奨学金を出したりするところもあるので、*mention* 獲得に燃える受験生もいる。さらに優れた生徒には *félicitations du jury* という評価が加えられることがある。バカロレアの各教科の採点官全員による判定会議(学校ごとあるいは地区ごとに行われる)を *jury* という

のだが、その会議で特に優秀と認められた生徒を表彰する記載で、通常は18点以上の生徒に与えられる。また年に10人ぐらいいは20点満点というすごい生徒がでる。



二年がかりで行われ、ほとんどすべての教科が論述式のため、一見非常に難しく思えるバカロレアだが、日々の授業をちゃんと理解していればまず合格点はとれる。そのうえ論述だからよほどはずれたことを書いているのでなければ部分点に期待できる。「名前が書いてあれば1点もらえる」などという噂もあるくらいだ。不合格になった場合でも、8点以上10点未満の生徒は追試を受けることができる。追試では筆記試験で受けた科目を2教科選択して口頭試問で受け直すというものだ。試験官はいろいろ質問して何とか正しい答えを導かせようとするから、たいていは当初の成績よりよい点数となり、バカロレアに合格することも可能だ。さらに平均点が9.8点などという場合は、高校三年間の全記録が載った個別の成績表を参照して、授業態度が良い場合には判定会議の一存で合格させる、などということもある。勤勉で真面目な生徒の方が、頭はいいのに授業を聞かずにサボっていた生徒よりいい成績がとれる仕組みとなっている。

さて今年のバカロレアだが、一般バカロレアの合格率は過去最高の89.6%だった。私の担当した生徒たちも無事全員が合格して一安心。ところが旦那に「サンジェルマンのバックがね…」と話しかけると、「大事件でもあったのか？」と聞いてきた。私にとっては *Bac*=バカロレアだが、警察官にとっては *Brigade Anti Criminalité* (私服警官の機動部隊) のことを指すので、たまに話がかみあわなくなるのだった。

◆ダルデンヌ兄弟の『イゴールの約束』を観て

会 員 中田 由美子

6月10日のシネクラブ例会で、前回の『ある子供』に続き、ダルデンヌ兄弟の監督作品『イゴールの約束』(1996)を鑑賞した。どちらもベルギーのリエージュ(ワロン地方〔フランス語圏〕)が舞台。ムーズ川が随所に出てくるのが印象的。ベルギーについての私のイメージは、世界遺産に登録されている美しい観光地ブリュッセル、高級チョコレート・ゴディバ等比較的豊かな国というものだった。しかし、シネクラブでの解説や二つの作品を見て、ベルギー国内の南北格差(フランス語圏のワロン地方とフラマン語圏のフランダース地方の言語境界線により、人的交流が少なく経済・教育に大きな格差)の存在や、多くの移民を抱えている現状等がわかり、驚いた。

父親のロジェ(オリヴィエ・グルメ)は息子のイゴール(ジェレミー・レニエ)と2人暮らし。14歳のイゴールは外国人違法労働者の売買をする父を助けながら、学校に行かず自動車修理工場で働いている。アフリカからの労働者のひとりアミドゥが足場から転落して生死にかかわる怪我をする。ロジェは不法労働が知られるのを恐れて、アミドゥを病院に連れて行かず、死なせてしまう。死の間際アミドゥは、イゴールに妻と赤ん坊の息子のことを頼むと言い残す。これが標題の「約束」であると思われるが、フランス語の« promesse »には、①約束 ②望み ③契約 とあり、この作品には①②③すべての意味が含まれているようだ。

前半ロジェとイゴールはとても仲のいい親子に描かれている。ロジェは違法な仕事に携わりまっとうな人間でないように見えるが、息子のことをとても愛しており彼のために家を建てることも目標にしている。イゴールは、客の財布を盗んだり14才で喫煙、バイクを改造して友達と乗り回したり不良少年のイメージだ。ロジェはイゴールに手伝わせて、ロジェの遺体を埋め、アミドゥの妻アシタに彼は「失踪した」と嘘をつく。後半、イゴールはアミドゥを死なせてしまったこと、アシタに嘘をついていること、何となく父親に従ってしまったことに罪悪感をつのらせ、ついに父親のもとを去って、アシタに寄り添うようになる。アシ



タの毅然とした態度、赤ん坊を必死で守ろうとする姿に、イゴールは父子家庭のゆえであろうか強い母性愛を感じている様子も微妙に描かれている。イゴールはアシタを売春婦として売ろうと車で連れていこうとするロジェから助けだして、彼女の親戚のところへ行けるように駅へと送る。その駅で、ついにイゴールはアシタにアミドゥの死を「告白する」ところで、映画は終わる。

後半は、イゴールの罪の意識、父親からの精神的自立の思いが行動に現われ、どんどん引き込まれていく感じだった。撮影も役者を非常に近距離でとらえているので臨場感いっぱい。イゴールは最後の場面で本当のことを話すが、キリスト教の考えでは「告解」ということで罪が赦されたと扱われているところが仏教とは異なるところだという感想も聞かれた。この作品では、イゴールの絶望的な状況からの脱出という形で「希望」が示されているが、30才となった俳優ジェレミー・レニエに、最新作『少年と自転車』(2011)では、ダルデンヌ監督は身勝手な父親を演じさせている。そうした監督の演出の仕方に、あったはずの「希望」はいつの間にか消され現実の状況は何も変わっていないかも知れない、それでも「希望」を示すこと自体に意味があるのではないかというコメントも聞かれた。一筋縄ではいかないフランス映画らしいもの、いや現実というのは実際そうなのかも知れないと思った。

《第29回シネクラブ例会のお知らせ》

次回からは4回にわたって「フレンチ・サスペンス」特集をお送りします。

第1回目は10月28日(日)午後1時半より、『華麗なるアリバイ』(Le grand alibi, 2007年、パスカル・ボニツェール監督)をお送りします。

詳細は次号モンナラにてご案内します。乞うご期待下さい! 問合せ: Nasai206@aol.com

講座「吾輩は猫である」に参加して思うこと

会員 藤村 久美子

『吾輩は猫である』の講座のある日、ジャメ先生が私に《 Vous êtes fidèle du chat ! 》とおっしゃって迎えてくださいました。講座では、お二人の先生方のフランス語・日本語両面からのアプローチはとても面白く、毎回楽しませていただいております。ジャメ先生が、日本人でさえむずかしい古風な表現、日本固有の事象、また漱石が好んだというオノマトペを、ご自身の卓越した感覚で言葉を選ばれ巧みにフランス語に訳されているのには、敬服しております。『吾輩は猫である』は、今から一世紀も前に書かれた作品とは思えないほど、ポンポンと軽快に運ぶ文体で、その現代的なタッチに引き込まれ、読破しました。この講座に参加しようと思ったのは、ジャメ先生に紹介していただいた、漱石の講義録「道楽と職業」(Divertissement et métiers)を読んで、明治という時代の枠を超えて思索した漱石という人間に興味をもったことに始まります。

夏目漱石は東京がまだ江戸だった最後の頃に生を受けています。徳川末期から明治維新にかけては、政治、社会が大きく変化し、価値観も混沌としていた時代です。こういう時代の中で、漱石はイギリスに留学し、人種や文明の違いからくるカルチャーショック以上の精神的打撃を受けたようです。特に、日本の滅私奉公的な精神と、西洋の個を重要視する精神のギャップを、肌で感じたことと思われます。そういうことが、日本に帰国し、彼の作品のテーマになったのではないのでしょうか？

漱石の作品には、人間の心の奥底に根源的に潜む欲望、自我とどこまでも対峙しようとする姿勢が貫かれているように思えます。今回『こころ』を再読し、さらにその感を強くしました。同じように心の葛藤を描いたほぼ同時代の島崎藤村の『破壊』と比べても、その立ち位置の違いを感じます。漱石も藤村も、社会の中の「個」の問題を深く掘り下げましたが、漱石の場合は、その当時押し寄せてきていた、お金に重きを置く近代という時代と直面して苦悩する人間を描きたかったのかなと思います。彼の作品の背後には、崇高な精神をもった漱石を感じます。そこはかたなく漂う気高さ、純粹さ。それが重いテーマであっても読後に何故か清々しさを感じさせる。現代人の私たちに共感を覚えさせるのは、それ故ではないかと思います。

《次回「ジャメ先生と『猫』を読む」講座の案内》

◇日時：9月8日(土) 11:00 ~ 13:00 ◇場所：奈良フランス語クラブ(藤原町)

◇参加費：2000円 ◇テキスト：プリント配布 ◇テーマ：「写生する」(Dessiner d'après nature)

◇連絡先：clubfrancenara@kcn.jp(ジャメ先生) 又は Nasai206@aol.com(浅井直子)

～ 会員のご紹介 ～

理事 森井桂子



先日、会員の中居公子さんから、奈良日仏協会の行事に参加したいと思いながら、お母様の介護があつて、全く参加できないというお電話を頂きました。今回はお忙しくて記事は書けないとの事ですので僭越ですが私が皆様にご紹介させて頂くことにしました。

葛城市兵家在住の染色アート作家、中居公子さんのお名前をもうご存知の方も多いと思います。フランスの国際公募展「サロン・ドートンヌ」に09年の初出品、初入選に続き、中居さんの二度目の挑戦となる今年も連続入選された事を伝える記事が、読売新聞、毎日新聞などに大きく掲載されました。「気づかなかった場所」と題された縦1.3m、横1.0mの今回の作品は、絹布にろうけつ染めやぼかし染めなど様々な染色技法を用いて、約4ヶ月かけて制作された

ものだそうです。今年の5月から6月にかけては、第44回スペイン美術賞展にも出品されました。作品はスペインの古いお城の地下堂の壁に展示され、アトリエで見るのとはまた違った魅力を見せてくれたようです。「これからも絶えず変化や遊び心を取り入れながら、作品を作りたい。」「自分にしか表現できない美術と工芸の間を目指した作品を追求し、今後も海外に挑戦したい。」との中居さんのコメントが両新聞の記事にありました。パリでの今秋の「サロン・ドートンヌ」美術展はシャンゼリゼで10月24日～29日に開かれます。その頃パリに居られる方はお出かけになられては如何でしょう。中居さんご自身もいらっしゃる予定だそうですので、展覧会のご報告は、ぜひご自身にさせていただきたいと思います。

第107回 フランス・アラカルト報告

副会長 濱 恵介

7月19日(木)、Stephan DUCOUP (ステファン・デュクー)さんをゲストに招いて、いつもの Mardi-Mardi でフランス・アラカルトが開かれた。お話の要点を紹介する。

職業は、イベントの企画や酒類の販売促進などを請け負うコンサルタント。フランスと日本を往復し、最近の滞在日数はおおよそ半々。パリにはマレー地区にギャラリーを共同で経営し、日本紹介や日仏文化交流に関わっている。(実に陽気なエンターテイナーでもある)

そもそも来日したきっかけは、20年前にアメリカ西部カリフォルニア滞在中に知り合った日本人が東京の自宅に招いてくれ、家族のように滞在させてもらったことだった。「アメリカの夢」に憧れ渡米したが、アメリカ文化にあまり馴染めず、そこで出会った日本人を通じて日本を知り、日本を愛するようになった。伴侶となる日本人女性と巡り合ったのは、国内旅行の途中。

歴史的に見て日本とフランスは大きな戦争や深刻な経済摩擦などがなく友好関係を育んできた。個人的には、日本との出会いは全くの偶然で、最近の若者世代のようにアニメやマンガを通じたものではない。人間関係を通じた異文化との接触、文化の交流が最も大事だ。

近年フランス人の日本への関心は非常に高くなっている。違いが大きいだけに夢も掻き立てられ、尊敬の念にもつながる。日本食もフランス人により親しまれてきた。一昔前はスシだけだったが、今はヤキトリ、ソバに加えタコヤキまである。オペラ通り近くの Rue

Sainte-Anne には本当の日本食の店が軒を連ねる。ケバケバしい看板の日本料理店は、たいてい中国人の経営。

最近出版された日本語の著書「French Lifestyle」の紹介があった。フランス人の普通の暮らしを簡潔な項目立てで紹介している。

なお、ゲストの名前 Stephan は、本来のフランス語ならば Stéphane である。ところが、アメリカでは Stephane と書くことステファニーという女性の名前と取られるので、本の著者名も英語風に Stephan としたとのこと。

本の記述にもある面白い話題:アメリカを代表するような布地デニムが意外にもフランスの地名に由来する。英語で Denim と書くが、元の言葉は serge de Nîmes (プロヴァンスの都市、ニームのサージ)である。ちなみに、ジーンズはイタリア北部の港町ジェノヴァのフランス語表記 Gênes (ジェーヌ)を英語風に読んでジーンズになった。元は帆布だったようだ。

最後は恒例のゲストによる詩の朗読。Jacques Prévert の“Paris at Night”を仲井さんのギター伴奏、Stéphane の演技・解説付きで聴く。いつもより多くフランス語の会話が飛び交い、楽しい2時間が過ぎた。



◆次回 第108回フランス・アラカルトのお知らせ◆

日 時: 2012年9月19日(木) 15:00 ~

会 費: 会員 1,000 円、一般 1,500 円 (お菓子和紅茶つき)

場 所: カフェ「Mardi Mardi」(マルディ・マルディ)

※奈良市登美ヶ丘3丁目12-9 登美ヶ丘ビル1F (TEL/FAX:0742-44-5701)

学園前駅からバス(110・128・129・130・138・260番)で7分、

西登美ヶ丘二丁目バス停すぐ(駐車場あり) <http://mardimardi.exblog.jp/11477753/>

講 師: Romain Béauce さん 1979年、サン・マロ生まれ、Rennes 第二大学卒。

現在、大阪で Kansai-Breizh 主宰、フランス語教師

お問合せ: 奈良日仏協会 0743-52-3939

◆フランス生まれの手芸講座 『カルトナージュ・レッスン初級・・蓋付きBOX』ご案内 ◆

マリーアントワネットの持ち物を彩ったとされるフランスの伝統手芸『カルトナージュ』を身近にチャレンジしてみませんか?(簡単に作れてさりげなくおしゃれに♪)

日 時: 2012年9月29日(土)13:30 ~ 15:30頃まで

場 所: カフェテラス サンフラワー (近鉄新大宮駅北へ徒歩5分)

会 費: 4,000 円 (レッスン料、材料費、ドリンク付)

持ち物: ハサミ、作品持ち帰り袋

講 師: 尼川 香陽子



◆秋の教養講座のお知らせ◆

濱 恵介副会長の講演『住まいの省エネ・エコロジー(仮題)』と翔ユリ子会員のシャンソンなど

日 時：2012年10月21日(日) 11:00～(10:30 受付開始)

場 所：奈良ホテル TEL 0742-26-3300 (代) 〒630-8301 奈良市高畑町 1096

会 費：5000 円(昼食、1ドリンク付き)

*詳細は、後日あらためてお知らせいたします。是非ご予約ください。

◆ 2012 年度 第 3 回理事会報告 ◆

日 時：2012年7月30日(月) 10:00～12:00

場 所：菜宴

出席者：坂本会長、三野副会長、ジャメ副会長、濱副会長、浅井理事、井田理事、仲井理事、中野理事、野島理事、樋口理事、三木理事、森井理事

議 事：1) 前回理事会以降の活動 ①シネクラブ、②フランス・アラカルト

2) 会員名簿 ①経過報告、②名簿の内容、③今後の方針

3) モンナラ編集 ①次号の案内、②編集体制の変更

4) 教養講座等の計画(秋の教養講座、美術鑑賞)

5) その他 20 周年記念誌について

**** 会員名簿について ****

このたび奈良日仏協会の会員名簿の小冊子を作成しました。モンナラに同封し、現時点で会員登録されている方にお届けします。ご回答のあった方々については、指定された情報を掲載しました。残念ながらご回答いただけなかった方については、お名前だけになっています。もし不備があれば、遠慮なくご指摘ください。この名簿は、会員相互の連絡や親睦の増進などにご活用いただければ幸いです。内容は毎年更新する予定ですので、変更が生じた場合はどうぞお申し出ください。なお、掲載内容は「個人情報」ですので、取り扱いには十分ご注意願います。会員名簿作成に当たり、ご協力をいただいた皆様に心から感謝いたします。(事務局 TEL/FAX 0743-52-3939 E-mail: afjn_info@kcn.jp)

月刊『歌劇』8月号に三野副会長のインタビュー掲載

宝塚花組公演『サン＝テグジュペリ 「星の王子さま」になった操縦士』の公演(宝塚7月27日～8月27日、東京9月14日～10月14日)にあたって、月刊『歌劇』(8月4日発売)に3頁のインタビュー記事が掲載されます。『星の王子さま』に散りばめられたさまざまな名言を取り上げて解説し、また今回の宝塚公演に向けてのメッセージが語られています。

編集後記

次号モンナラより編集を中浦さんにバトンタッチすることになりました。約1年間ピンチヒッターとして皆様に読みやすく楽しんでもいただけるモンナラをお届けできればと心がけて編集してまいりました。至らぬ点をご容赦いただければ幸いです。また、慣れない編集作業を支えて下さいました皆様に心よりお礼申し上げます。これからもモンナラをよろしくお願いします。ありがとうございました。(中野愛弓)

⌘ 中浦東洋司さんプロフィール…大阪外大卒、大阪府港湾局でルアーヴルとの提携などフランスとの関係ある業務をされ、モンナラ編集経験も。お楽しみに……!

皆様からの原稿をお待ちしております。奇数月15日締切 E-mail: n4u6br@bam.biglobe.ne.jp(中浦さんまで)

Mon Nara juillet-août 2012 7,8 月合併号 Numéro251

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP: <http://www.afjn.jp> E-mail: afjn_info@kcn.jp TEL&FAX 0743-52-3939

〒630-8691 郵便事業株式会社奈良支店 私書箱 30 号(郵便物のみ)

発行責任者: 坂本成彦